

アンデス文明形成期研究に見る在地性の問題

— チャビン問題の学史的考察より —

松本 雄一 *

本論ではアンデス考古学において、その草創期から長く重要な課題であり続けているチャビン問題を学史的に考察し、アンデス文明の形成過程を研究する中で在地性がどのように認識されてきたかを解明することを試みる。チャビン問題をめぐる研究は、フーリオ・C・テーヨとラファエル・ラルコ・オイレ以来、チャビンと名づけられた広域にみられる物質文化のパターンを汎地域的な現象（チャビン現象）としてとらえようとするマクロな視点と、在地性、すなわち地域的な多様性の発展に焦点を当てたミクロな視点が、その時に使用可能なデータと調査者の理論的背景との関わりの中で揺れ動き、絡み合いながら進んできた。本論では、これまでの学史上特に重要と考えられる研究を年代別に取り、その背景に存在する当時使用可能であったデータと研究者の問題意識を考察する。さらに現在の研究動向を過去からの学史の中に位置づけることでチャビン問題をめぐる研究の現在の到達点を考察し、今後の方向性を模索する。

Key Words

アンデス文明
形成期
チャビン問題
学説史
在地性

目次

- I はじめに
- II 考古学における在地性
 - 1. 分析スケールの問題
 - 2. アンデス考古学におけるホライズンの概念
- III チャビン問題の成り立ちに見る在地性の問題
- IV チャビン現象の歴史への関心
- V リチャード・バーガーのチャビン論
- VI チャビンとクピスニケ再び
- VII チャビン・デ・ワンタルにおける新たな調査
- VIII 汎地域的視点と在地性
- IX おわりに

このように定義された文化が、その内部で完全な均一性を有するものでないこと、外部の刺激から閉じたものではないことは広く認識されており、それぞれの様相を分析するための枠組みの模索は現代に至るまで続けられていると言ってよい。ごく大雑把に整理すると、ある文化の内部の多様性、不均衡を分析する概念として、相互作用圏 (interaction sphere) (e.g. Caldwell 1964; MacNeish *et al.* 1975)、同等政体間における相互作用論 (peer polity interaction) (Renfrew 1986) が、外部との関係の分析に対応するものとして、世界システム論 (world systems theory) (e.g. Blanton & Feinman 1984; Chase-Dunn & Hall 1997; Kohl 1987; Hall *et al.* 2011; Schneider 1977; Wallerstein 1974)、ソーシャル・フィールド (Wolf 1984; Kohl 2008)、グローバルゼーション (Jennings 2011; Pitts 2008) などが挙げられよう。ここで認識すべきは、これらの枠組みが、異なるレベルの分析スケールを結びつけるために用いられており、明確に特定の地理的範囲や社会規模を前提としていないという点である。この点は、世界システム論が、その考案者であるウォーラステインの意図を超えて、様々な地理的範囲の中の社会経済的不均衡を解釈するために用いられている点 (e.g. Hall *et al.* 2011; Wallerstein 1993)、それぞれの概念をテーマとした著作や論集が、多様な地理的スケールを分析対象としている点 (e.g. Jennings 2011; Renfrew & Cherry [eds.] 1986) を指摘しておけば十分であろう。当然ながら、それぞれの脈絡に応じて、経験論的に枠組みが選択され、異なるレベルの事象が分析対象としての「全体・総体」として定義されることになる。

この中で「在地性」が問題となるのは、「在地」よりもマクロな存在 (政体、現象、文化など) がその外部に想定される場合であり、古典的な文化接触と変容の問題と密接に関わることとなる。人類学と考古学において、文化接触とそれがもたらす変化は依然として重要なテーマであり続けているが、特に考古学においては、地域間交流の活発化と複合的社会 (complex society) の成立と発展の間にある種の相関関係が存在することは様々な地域で指摘されている (e.g. Feinman & Marcus [eds.] 1998; McIntosh 2005; Trigger 2004)。双方の間に単純な因果関係を想定する研究者も存在する (e.g. Shady Solís 2014) が、このような立場は、古典的な伝播論や文化変容理論 (acculturation theory) の流れに属し、一方の文化の優位性を前提とし、優位な側から他方への一方的なプロセスを想定する古典的な理論に基づいている (e.g. Spicer 1961)。1980年代以降、一方的なプロセスを前提とする理論は強く批判され、より

相互作用に重点を置いて、地域間交流と文化接触の動態をとらえようとする試みへと問題意識が移行している点は認識しておく必要がある (e.g. Cusick [ed.] 1998; Schortman & Urban [eds.] 1992)。

2. アンデス考古学におけるホライズンの概念

先スペイン期のアンデス社会を中央アンデスというマクロな視点から考察する際に避けて通れないのが、20世紀半ばから議論が始まり、現在も確固として残る「ホライズン (Horizon)」の概念である (e.g. Rice 1993)。半世紀をゆうに超えるその歴史の中で、ホライズン概念は、「芸術様式」 (e.g. Phillips & Willey 1953; Willey & Phillips 1958)、「進化論的な価値判断を避けた中立的な時期名称」 (e.g. Menzel *et al.* 1964; Rowe 1956, 1962, see also Ramón 2005)、「物質文化のマクロなパターンとその背景を解釈するための枠組み」 (e.g. Burger 1993)、などの様々な役割を、時として複数同時に担ってきた。この点は、アンデスの先スペイン期、時に形成期の考古学における議論がどのようになされてきたかと密接に関わっているように思われる。

ホライズンという用語は、マックス・ウーレのコレクションを再分析して編年案を提示したアルフレッド・クローバーによってはじめて使用されたとされる (Ramón 2005: 9-10; Rice 1993: 4)。ウーレはティアワナコ様式とインカ様式の土器がペルーとボリビアにおける編年の指標となることに気づいており (Rice 1993: 4; Rowe 1962: 45; Uhle 1902)、クローバーはここにチャピンを加えて、現在の編年にも通じる3つのホライズンを、美術史的な物質文化の様式として定義した (Kroeber 1944)。ホライズンの概念は、ホライズン様式として「広範囲に広がる特異なものであり、その故に他の、より在地の様式との相対的な時間関係を位置づけるために役立つ」ものとして定義された (Kroeber 1944: 108; Rice 1993: 4の引用を筆者訳)。一方で、クローバーの定義においては、ホライズン様式それ自体が内包する時間とその生成過程に関しては明確に考察されていないという問題を抱えていた。この点を明示的に組み込んだフィリップ・フィリップスとゴードン・ウィリーによる1953年の定義が、現在までアンデス考古学で用いられているホライズンの1つの基盤であると言ってよい。彼らは、最初にホライズンを比較的限定された時間に広範囲に広がる様式 (ホライズン様式) として定義し (Phillips & Willey 1953: 625)、その後この定義を様式それ自体から拡張し、特定の技術、交易、文化的慣習の総体、すなわち文

化史的パラダイムにおける「文化」に近い概念によって再定義した(Willey & Phillips 1958; Rice 1993: 2)。ここで注意すべきは、「短期間に広い地理的範囲に拡大する様式」とその背景に比定される「文化」としてのホライズンという概念は、「中央 / 周縁」という二項対立的な区分を暗黙の裡に含意するというドン・スティーヴン・ライスの指摘であろう(Rice 1993: 2)。短期間の拡大という定義は、その様式、文化が生まれた「中心」が存在することを意味しており、「中心」からその影響が「周縁」に伝播するという認識を前提としている。そして、その中心とみなされるものは、同時期の社会の中で特異な形で発展した遺跡(e.g. チャビン・デ・ワントル、ワリ、ティワナク) やその背後に想定される政体(e.g. インカ帝国) であったということになる。ホライズンは、様式、文化を時空間上に位置づける概念であると同時に、文化史的パラダイムにおける文化とその変化に関する視点としての伝播論を内包するものとしてアンデス考古学史上に立ち現われたことになる。

ウーレやクローバーがその価値を認めた、広い空間を同時代性で結びつけることを可能とする有益な編年的指標という側面は、ウィリーたちにとっても維持されていた。ここでは、ウィリーによるホライズン概念は、時間を限定すると同時に、その広大な空間の内部を均質な文化現象として定義してしまいかねないという問題点をはらんでいたことに注目する必要がある。「トップダウンの視点からのマクロなパターンの存在を前提としている」という批判が可能であり、地域の歴史的固有性、あるいは在地性を重視する視点の必要性が指摘されるという点は、考古学における世界システム論の援用をめぐる議論と同一の構造を有している(e.g. Hall *et al.* 2011)。さらにホライズンに関しては、マクロなパターンを解釈するためのモデルであると同時に、編年を反映した時期区分のための概念という意味が付加されることとなった。ある解釈モデルが、特定の地域と時期に関する使用を前提とするという特殊な状況が生じたのである。ここまでの一般的な議論を踏まえたうえで、以下でアンデス考古学におけるチャビン問題の生成過程を概観し、研究の現状とその問題点を指摘していきたい。

Ⅲ チャビン問題の 成り立ちに見る 在地性の問題

20世紀初頭にドイツ人考古学者マックス・ウーレが唱えた、アンデス文明の起源を中米に求める伝播論に対して、ペルー人考古学者フーリオ・C・テーヨはアンデス文明のアンデス起源説を提唱し、チャビン文化をアンデス文明の文化的母体とみなした(Tello 1943, 1960)。この文化は、アンデス中央高地に位置する形成期の大神殿、チャビン・デ・ワントル遺跡を指標遺跡とし、同遺跡の建築、遺構、遺物と様式的に共通する要素が、中央アンデスの広い地理的範囲に存在するという主張によって定義されていた。

チャビン・デ・ワントル遺跡にみられる建築や遺物、特に石彫に表現された図像表現の精緻さと多様性、建築規模の大きさと複雑な遺構の存在は、テーヨにチャビン・デ・ワントルから中央アンデス全域への文化要素の伝播を想定させるに至り、同様の視点はテーヨの弟子たちによって継承されることとなった(e.g. Carrión Cachot 1948; Tello 1943)。テーヨの論においては、チャビン・デ・ワントルが「伝播の中心」であるという認識が前提となっていたため、その他の地域は必然的に「周縁」とみなされることとなった。

この論調に真っ向から対立する論を唱えたのが、ペルー北海岸を中心として活発な調査と編年研究を行った、ラファエル・ラルコ・オイレである。同地域のチカマ河谷下流のバルバコアやパレンケといった墓域の遺跡を発掘したラルコは、北海岸においてテーヨがチャビン文化の拡散の証拠と考えたものは(e.g. Tello 1943: 135)、北海岸で出現し独自に発展した在地の文化であるという説を唱えた(Larco 1941, 1948)。彼の立場は以下の記述に明確に示されている。

“もし我々が、いわゆるチャビン文明と呼ばれるものに含まれるとされる多様な文化を注意深く分析するならば、以下のような結論に達する。それらの文化が共通する文化的要素を有するとしても、より多くのその他の要素もまた存在し、それによってある文化を他から区別することができる。… 共通要素は文化的要素の交流によるものであり、人々が自身の文化的モードを放棄したことを意味するわけではない”(Larco 1948: 16; Burger 1993: 44の引用を筆者訳)。

テーヨとラルコの立場の違いは、その後のチャビン問題をめぐる様々な論点を先取りしていると言ってよい。ラルコによって定義されたクピスニケ文化は、テーヨから見ればチャビン文明の周縁社会であり、ラルコから見ればペルー北海岸独自の在地文化であった。さらに、リチャード・バーガーが指

揃るように、テーヨがチャビン文化を広い範囲で比較的均一なものとしてとらえ、細かな文化的多様性は地域の環境と資源の差異によると考えた一方で、ラルコはテーヨがチャビン文化として想定した時期を地域的な多様性によって特徴づけられる時代とみなしたのである(Burger 1989: 546, 1993: 44)。後に述べる通り、北海岸とチャビン文化の関係性をめぐる論争は、チャビン問題をめぐる学史上、繰り返し現れることになる。また、ウーレとテーヨ、テーヨとラルコの対立は、扱う地域的なスケールが異なり、その背景に当時の政治的、社会的な状況が存在する(e.g. Mesía 2006; 関 2008)が、その一方で在地性をどのように評価すべきかという共通した論点を含んでいる。

その後、テーヨのチャビン論は、ペルー国内以外にもアメリカ合衆国の研究者を中心として基本的に支持され(e.g. Bennett 1944; Kroeber 1944; Rowe 1967b; Willey 1948, 1951)、ホライズンをめぐる議論において極めて重要な位置を占めることになる。バーガーは、この時期に「チャビン・ホライズンの概念は統合的な記述を行うためだけでなく、ペルーの先史時代をめぐる語りを組織するための編年上の枠組みとしても用いられるようになった」(Burger 1993: 46)と指摘している。テーヨの均一な文化現象としてのチャビン文化が、先述のクローバー、ウイリーたちの編年指標としてのホライズン概念の中に組み込まれたという理解が可能である。

チャビン拡散のメカニズムの考察と背景に想定される社会組織(Carrión Cachot 1948; Willey 1948, 1962)に関する考察や、チャビンを定義する文化要素の基準の厳格化(Willey 1951)などは、その後数十年にわたって主要なテーマであり続けたが、その多くの場合ホライズン概念に含まれる文化的均一性、時間と空間の在り方などが前提として組み込まれていた(Burger 1993: 47)。結果としてこの時期までは、ペルーの先史時代におけるチャビン文化の編年の位置づけが問題となることはあっても、チャビン現象の歴史的過程それ自体はホライズン概念に取り込まれて問題化が困難になっていたことになる。この点は1950年代後半以降、歴史学者であり考古学者でもあったジョン・ロウによって、批判されていくこととなる。

IV チャビン現象の 歴史への関心

ロウは、ウイリーとフィリップス(Phillips & Willey 1953; Willey & Phillips 1958)の定義とは異なる形でホライズンを用いることを提唱した。ロウはホライズンが同時性と文化的相同性を前提とした発展プロセスの段階(stage)として定義されることに明確な異議を唱えており、「文化的過程は調査のゴールであって、土器を編年順に整理しようとしている段階での前提となるべきではない(Rowe 1956: 627)」という言明に彼の立場が明確にあらわされているといえよう。実際のところはウイリー自身も、現象としてのホライズンには伝播を前提とするが故の地域間のタイムラグが存在することに気づいてはいたが、時期区分という視点からは、この点をあえて無視して用語を用いていた(Willey 1945: 55)。そこでロウは、このような文化的相同性を示す分析単位と同時期性を扱う分析単位を混同することを避けるための方法論を模索することになる。彼はある地域の編年を確立し、より広い地理的範囲の編年を関連づけるための指標編年(master sequence)とみなすことでこの問題を解決することを試み、ペルー南海岸のイカ河谷においてドロシー・メンゼルやローレンス・ドーソンと共に土器様式に基づいた通時的編年を構築することを試みた(e.g. Menzel 1964, 1976; Menzel *et al.* 1964; Rowe 1956, 1962)。ロウは用語法として従来の3つのホライズンを保持したが、その概念は様式あるいは文化の相同性という前提となる含意から解放され(e.g. Burger 1988: 107)、中立的な同時性のみを示し、それによって地域間比較の枠組みを確立し、ある様式の伝播や文化の変化のプロセスを分析することを可能とするものとして意図されたのである。そのため、チャビン・ホライズンではなく、前期ホライズンという用語が選択され、前期ホライズンは「チャビンの影響がイカ河谷に到達した時期から、土器に見られる焼成後の顔料充填の技法が多彩色の顔料を用いた装飾に取って代わられるまでの時間」(Rowe 1962: 49)と定義される。さらにその時期幅もウイリーらの定義による「短期間」という意味を持たないものであり(Rowe 1962: 50)、実際に前期ホライズンに関しては、紀元前1100年から700年という時間幅が想定されていた(Menzel *et al.* 1964: 4)。このようなロウの定義においては、「前期ホライズン」はある時間幅を表すのみであり、チャビン文化がいつその中心で出現したか、その影響がいつ他の地域に到達したかなどとは関係がないことになる。このようなロウのアプローチは、それまでの文化的相同性を前提としたチャビン論の問題点を解消するという意図に基づいていたが、2つの問題点を残してしまったように思われる。1つ目は

絶対年代の問題である。ロウは、いち早く放射性炭素年代測定法の重要性に気づいていたが¹ (Rowe 1967a)、当時のデータ不足から仮説的な年代設定しかなかった。皮肉にもロウが指標編年とみなしたイカ河谷においては絶対年代データの蓄積が遅れ、イカ河谷を中心としてアンデス全体の編年を関連づける試みはついに達成されることはなかった。もう1つは、ロウによる前期ホライズンの定義それ自体において、伝播の中心としてのチャビン・デ・ワンタルが明確な前提とされていたことである。この点においては、ロウ自身もテヨのチャビン論を受け入れたうえで、その歴史的過程を明らかにするというスタンスを取っていたことがうかがえよう。ロウにとってチャビン文化の地域的多様性は、伝播の速度、順番という形で主に認識されていたと考えられる。ただ一方で、「チャビンの影響がイカ河谷に到達した時期」が絶対年代で確定できず、最も重要な点である「文化的な含意から解放された時間幅」を明確に設定できなかったことから、ロウによるホライズン概念は客観的な時期区分としての役割を十全に果たせなかった。また、そもそもの「チャビンの影響」をどのように定義するかという点に関しては、テヨ、ウィリーらの立場を踏襲していたことから、チャビン・ホライズンと前期ホライズンがその後長く混同される結果を招いた(e.g. Pozorski & Pozorski 1993)。

このようなチャビン文化の歴史性、チャビン現象の歴史的プロセスの解明は、その編年上の細分という形でロウの他の研究に反映されており、様式的セリエーションを用いた石彫と土器の編年(Menzel 1964; Rowe 1962, 1967b)は、様々な批判を受けながらも現在に至るまでその影響力を保持していると言ってよい(e.g. Burger 2019)。発掘データや絶対年代から半ば独立した形で行われる様式的な分析に関する補完と批判の試みは常に存在してきたが(e.g. Burger 1988; Kembel 2001)、ここではロウとその協力者たちが、チャビン・デ・ワンタルの石彫の様式変化とイカ河谷の土器に見られるチャビンの図像の様式の変化が並行して起こった、とみなしていた点を指摘するにとどめておく(Menzel *et al.* 1964: 257-259)。ホライズン概念に含まれる同時性と文化的相同性を批判し、チャビン現象の歴史過程を考察するための枠組みを意図する一方で、その確立のために「チャビン・デ・ワンタルを中心とした周縁への伝播」というチャビン・ホライズン論を前提とせざるを得なかった当時の学問的な状況がうか

がえる。ただし、チャビン現象の歴史性に着目し、中央アンデスの各地を編年的に結びつける必要性を指摘した点は、高く評価されるべきであろう。

同時代の研究者の中で、ロウが指摘したチャビン現象の歴史性に関する問題点を具体的な発掘調査から提示するに至ったのが、ペルー人考古学者であるルイス・G・ルンブレラスである。チャビン・デ・ワンタル遺跡の異なる回廊を発掘調査したルンブレラスは、オフレングス回廊とロカス回廊で発見された土器の様式が異なることに着目し、はじめてチャビン・デ・ワンタル遺跡の土器編年を提示した(Lumbreras 1971; Lumbreras & Amat 1969)。当時の絶対年代データの問題点に加え、それぞれの様式の層位的関係を確定するためのデータが得られなかったこともあり、その編年は後年大きな変更を迫られた(e.g. Lumbreras 1989, 1993)。しかし、チャビンを時間的に均一なものとしてとらえていた当時のチャビン・ホライズン論からは明確に一線を画した試みであったと位置づけられる。さらに、土器様式の地域間比較を通じてチャビン・デ・ワンタルの土器編年と関連づけており、方法論は異なってもその問題意識はロウと共通していたことが読み取れよう。

ロウとルンブレラスに代表される1960年代から70年代までのチャビン現象をめぐる研究は、均質な歴史性を前提としたそれまでのチャビン・ホライズンの問題点を具体的なデータから浮き彫りにしたと位置づけることができよう。また、両者ともチャビン・デ・ワンタル自体が中心であり、その時期的変化に対応する変化はチャビンの影響を受けた他地域でも起こっていたという認識を有していたと考えられる。そのため、在地性という問題は地域間編年の確立という点に限定されていた。両者にとってチャビン現象における地域的多様性は主要なテーマとはならなかったように思われる。チャビン現象の時間的空間的な均一性を前提とする従来のホライズン論から、時間的な均一性という前提を問い直し、歴史性に関する理解が進んだのが70年代までの研究であると位置づけることが可能であろう。

1 ロウの編年体系全体に関する解説と分析としては、Ramón 2005を参照。

V リチャード・バー ガーのチャビン論

1970年代になると、それまで漠然と「チャビン」あるいは「チャビンの」とされていたいくつかの遺跡において、放射性炭素年代測定法による絶対年代データが提示されるようになった(e.g. Burger 1981)。同時にチャビン・デ・ワントル遺跡自体においてもロサ・ファン率いるペルー国立サン・マルコス大学の調査団と、アメリカ合衆国の考古学者であるリチャード・バーガーによって新たな調査がなされた(e.g. Burger 1978, 1984, 1998; Silva 1978)。ここでは、その後のチャビン問題／現象をめぐる研究を牽引することとなった、バーガーの研究をやや詳しく見ておくこととしよう。

カリフォルニア大学バークレイ校人類学部博士課程においてジョン・ロウの学生であったリチャード・バーガーは、1975年から76年にかけて、チャビン・デ・ワントル遺跡で発掘調査を行い、はじめて層位と土器様式を対応させた編年を提示した。バーガーは神殿建築ではなくその周囲の居住域に焦点を当てたが、この選択によって小規模な調査であったにもかかわらず、異なる土器様式間の層位的関係を考察することが可能となった。この調査で得られた絶対年代データに基づいて、ウラバリウ相(850-460 B.C.)、チャキナニ相(460-390 B.C.)、ハナバリウ相(390-200 B.C.)の3時期の遺跡編年提示され、ロウによる石彫と建築の編年との関連づけと、ルンプレラスの土器編年の見直しがなされることとなった(Burger 1978, 1984)。さらに、居住域に焦点を当て、遺物分布範囲の全体でサンプリングを行うことができたため、人口規模の通時的変化に対する仮説を提示することが可能であった。この時点での彼の考えを本論に必要な範囲で以下にまとめておく。

- ①チャビン・デ・ワントルは紀元前850年頃に出現し、その後建築と人口の拡大を伴い、紀元前400年頃に始まるハナバリウ相においてその最盛期を迎えた。
- ②特にハナバリウ相の居住域からは、遺物の分布状況の差から階層分化が存在したことがうかがわれた。
- ③ハナバリウ相は200年程度と比較的短期間の後に終焉を迎え、チャビン・デ・ワントルの神殿としての機能は失われた。

この時点で、バーガーはロウが意図したチャビン・デ・ワントルの石彫と建築の編年、ルンプレラスが意図した土器編年を統合したと位置づけられよう。さらに、それまで漠然と論じられるのみであった、チャビン・デ・ワントルの社会組織とその変化に関する具体的なデータを手に入れたことになる(e.g. Miller & Burger 1995)。このような自身の研究を基に、バーガーはチャビン・デ・ワントルと他の中央アンデス諸地域との関係を考察する道へと踏み出すことになったが、その際に彼が目にしたのは、土器様式と絶対年代であった。

まず、当時使用可能であった絶対年代データを整理したバーガーは、「チャビンの」と漠然と考えられていたカバヨ・ムエルト、ガラガイ、ラス・アルダスなどの遺跡が、チャビン・デ・ワントル成立以前、あるいはその最盛期であるハナバリウ相以前に終焉を迎えていたと論じた。さらに、土器様式の地域間比較を通じて、ハナバリウ相と類似し、同時代と考えられる土器が中央アンデスの広い範囲に分布していると指摘した(Burger 1981, 1988)。このようなデータを注意深い民族誌的類推によって統合したのがバーガーによる新たなチャビン・ホライズン論であり、その後現在に至るまで彼は補強と修正を続けている。以下に簡単にまとめておく(松本 2009)。

バーガーによれば、ハナバリウ相に対応する時期に汎地域レベルで1つの土器様式が広まり、祭祀建築が大型化する。この現象は冶金、石材加工、土木、織物等の様々な技術革新をともなっており、それらが図像などを運ぶメディアともなった。さらに時期を同じくしてチャビン・デ・ワントルを中心とした巡礼システムが確立し、それによって地域間交流が加速した。バーガーはこれらの要因が複合的に結びつくことによりチャビン・デ・ワントルの宗教的なイデオロギー(チャビン・カルト)が各地に広まり、階層化に代表される大きな社会変化に対応して起こったと考えている(Burger 1988, 1992, 1993, 2008)。また、このような変化が200年という比較的短期間において起こり、類似した物質文化の様式が広範囲にみられるようになる現象の背景を説明するため、新たにチャビン・ホライズンという概念の有効性を主張した(Burger 1989, 1993)。

ここではバーガーによるチャビン・ホライズンの定義をウィリーとロウとの比較において検討してみよう。基本的にバーガーによるホライズン論は、「短期間のうちに広範囲の地理的領域に、類似した物質文化の様式が確認される」という時空間的な定義という点でウィリーとフィリップスによるもとの概念を継承している(Phillips & Willey 1953; Willey & Phillips 1958)。一方で、テーヨ以来の「均一な文化現象としてのチャビン文化」というテーゼを明確に否定しているが、背

景に特定の文化現象を想定している点は共通しているといえる。さらに、チャビン現象の歴史性という師ロウから受け継いだ視点は、チャビン・デ・ワントルの歴史の中でその最終相であるハナバリウ相に至る通時期的変化を重視する点、特定の遺物様式、技術の出現を時期決定の客観的基準とする点、ホライズンの年代を確定し地域間比較を行うための枠組みとして用いようとする点に現れている²。ウィリーらによってホライズン概念の前提として組み込まれた文化的同一性を、絶対年代をはじめとする新たなデータを用いて解体し、様式論としてのホライズンの背景にある汎地域的な社会変化のプロセスを考察したのがバーガーの研究であり、その成果に基づいたうえで、客観的な時期区分というロウの意図と類似した形でチャビン・ホライズンの有効性が主張されたのである(Burger 1989, 1993)。またここでは、バーガーの議論が、「プロセス考古学の流れを汲む地域を限定してセトルメントシステムを考察するアプローチ」に対するアンチテーゼとして意図されていたことを理解する必要があるだろう(e.g. Burger 1993: 41; Burger & Matos 2002)。バーガーのチャビン・ホライズン論は、河谷や盆地などの、限定された地理的領域に焦点を当てるアプローチが隆盛であった1970年代から1980年代にかけての研究において前提として存在していた、「特定の地理的領域を閉ざされたものとして扱う視点」に対して、その前提自体への批判として位置づけられることとなる(e.g. Burger & Matos 2002: 169)。

先にも触れた通り、バーガーの論においては、それまでのチャビン問題をめぐる議論で暗黙の前提とされてきた「均一な文化現象としてのチャビン文化」というテーゼが明確に否定されており「同質性と異質性 (Unity and Heterogeneity)」の双方を理解することに主眼が置かれている点が重要である(Burger 1988, 1992)。「同質性」に対する焦点が従来のチャビン論、ホライズン論の流れを汲んでいることは明らかであるが、では「異質性」をバーガーはどのように理解しているかという点を考えてみたい。筆者の理解では、この点は地域的な多様性を文化現象としてのチャビンの中に組みこむ試みであり、汎地域的な視点と常に対になっている。まずバーガーは、形成期前期・中期に各地に栄えた多様な文化の存在を前提とし、チャビン・デ・ワントル神殿を中心とした社会が、それらの要素を取捨選択して組み合わせ、形成期後期後半の紀元前400年頃、チャビン・デ・

ワントルにおけるハナバリウ相に対応する時期に新たな宗教(チャビン・カルト)として再構成したと考える。そして、その拡散が様々な地域に共通する様式が存在と同時期に起きた社会変化を説明することとなる。この場合、地域的多様性は「チャビン・カルトを受け入れたかどうか」、あるいは「どのように受け入れたのか」という形で探求されることになる。多様な地域文化の「後の統合者 (late synthesizer)」(Quilter 2008: xxv) という意味でチャビン・デ・ワントルが位置づけられているため、紀元前400年を境として、地域的多様性の認識が、ホライズン現象の中の「異質性」として読み替えられることとなる。土器様式を例として述べるならば、紀元前400年以前の土器様式に見られる多様性は地域文化の展開と位置づけられるのに対し、紀元前400年以降に各地にみられる多様性はチャビン・デ・ワントルの宗教的影響(チャビン・カルト)に対して、それぞれの地方がどのように関わったかという視点から解釈される。例えば、ネペーニヤ谷、カスマ谷などはチャビン・カルトを拒絶し在地伝統が継続、興隆した地域とみなされ(e.g. Burger 1993: 67, 2008: 699)、それを受容した他地域に関しても在地様式とハナバリウ的な様式の併存、融合が様々な形で現れると論じられることになる(e.g. Burger 1988: 116-117, 1993: 60-63)。

VI チャビンとクピス ニケ再び

1990年代以降、中央アンデス各地における新たなデータの蓄積に伴い、バーガーのチャビン論を批判的に検討する研究が相次ぎ、現在に至るまで論争が続いている(e.g. 井口1996; Inokuchi 1999; Kaulicke 1994, 2015; Silverman 1996)。この議論は、北海岸クピスニケ文化に関する研究の蓄積(e.g. Elera 1993, 1997, 1998)と長期にわたる大規模な発掘で基礎となる精緻な編年が確立されたクントウル・ワシ遺跡(e.g. Onuki [ed.] 1995)のデータが提示されることによって可能となったと言ってよい。これらの研究をチャビン問題の脈絡でとらえるならば、バーガーがチャビン・ホライズンと定義する現象の中に組み込んだ地域文化、あるいは在

² 筆者は、ロウによる指標編年(Master Sequence)に対応するものが、バーガーにとっては自身が確立したチャビン・デ・ワントルの土器編年であったのだろうと考えている。

地社会に関して、逆に地域レベルのデータからその独自性とチャビン現象からの独立性を重視した論を提示する点が重要である。この点で、テヨとラルコの対立図式が、類似したホライズンや伝播の問題をめぐって再生産されたとみなすことも可能であろう。物質文化の様式的差異が議論の1つの鍵となっていた点も同様である。ただし、当時に比べると絶対年代データの存在、理化学的手法の導入によりはるかに精緻な議論が可能となってきたのである。特にクントゥル・ワシ遺跡に関しては土器の様式編年と絶対年代の充実が著しく、異なる立場の研究者がクントゥル・ワシの編年を基準として議論を進める状況が継続している(e.g. Burger & Salazar 2008; Kembel 2008)。

カルロス・エレラは、埋葬伝統とその背景にある宗教伝統を共有する社会の複合体としてのクピスニケ文化の伝播論的な意味での、あるいは直接の移住による拡散が、物質文化の共通性を生み出したとしている(Elera 1993, 1997, 1998)。エレラによる議論は、彼の定義するクピスニケ文化の側での絶対年代データの不足から、その論理構造としては物質文化の様式にその主な根拠を置いており、その点でこれまでの地域文化の定義問題に回帰してしまった印象をうける。ごく単純化すれば、クピスニケ拡散論は、言い換えればクピスニケ・ホライズン論といっても差し支えないものであり、その様式が何処で生まれたかに関してバーガーとは異なる立場を取っているということになる。

クントゥル・ワシ遺跡のデータは、年代と様式の両面から、バーガーの議論を批判的に検討することを可能とした(井口 1996; Inokuchi 1999; Onuki [ed.] 1995)。明確な層位と出土コンテクストに対応した遺物様式のデータは、バーガーによって提示された編年の枠組み、特に彼によってハナバリウ相との対応が想定されたクントゥル・ワシ期の年代が、紀元前 400 年というバーガーが想定したハナバリウ相の時期に数百年以上先行することを実証的に示した。またクントゥル・ワシ期に関しては、豊富に出土した土器資料と共に、金製品や、人骨のデータからも北海岸クピスニケ文化との強いつながりが論じられた(加藤・井口 1998: 211-214)。結果として、バーガーの唱えるホライズン現象とは別個の地域的发展とし

てベルー北高地の発展が描写された³。

実証的かつ経験論的なデータの蓄積のうえに立って、ホライズン現象としてのチャビンに対立する地域的发展としてのクピスニケ文化や、クントゥル・ワシをはじめとする他地域における大センターの多様性、すなわち在地性に目が向けられたと言ってよいであろう。アンデス文明の形成過程において、神殿を生み出した社会の具体的な生成と変化のプロセスを実証的に追うという日本調査団独自の問題意識は、チャビン問題をめぐる地域的な視点の重要性を明確に示し、バーガーのチャビン論に存在するチャビン・デ・ワンタルを「中央」とし、それ以外の同時代の遺跡を「周縁」ととらえる視点に異議を唱えたことになる⁴。

一方で、1990 年代に盛んになった、クピスニケ文化をめぐる議論は、バーガーの議論にあった汎アンデス的な視点を保持できなかったという印象は否めない。議論は、チャビン・デ・ワンタルやクントゥル・ワシをはじめとする北部の大センターと北海岸の関係に集中し、ワスコ、アヤクチョ、パラカスといったチャビン・デ・ワンタルより南側に位置する社会が詳細な分析のもとにクピスニケ文化との関りで論じられることは少なく、あったとしても漠然とした伝播論的な視点から様式的類似性を言及されるにとどまっていた(e.g. Elera 1998; Ochatoma 1985, 1998; Kaulicke 2015)。

VII チャビン・デ・ワンタルにおける新たな調査

現在チャビン・デ・ワンタルにおいては、ジョン・リック率いるスタンフォード大学の調査団が 1994 年から調査を行っており、主に建築のプロセスと絶対年代に関する新たなデータを発表している(Kembel 2001, 2008; Kembel & Haas

3 ネペーニヤ河谷においてセロ・ブランコ遺跡とワカ・パルティエダ遺跡を調査した芝田幸一郎も、バーガー自身がハナバリウ相とチャビン現象を結びつける根拠としたレリーフの年代をはじめとする絶対年代データから、同様の指摘を行っている(e.g. Shibata 2010: 306)。芝田による、チャビン現象とは別個のものとしてネペーニヤ河谷の地域間交流の在り方や、その後の在地的変化に焦点を当てた論考に関しても、クントゥル・ワシにおいて北海岸と北高地の在地的発展に焦点が当てられたことと同じ脈絡でとらえることが可能であろう(e.g. Shibata 2014; Chicoine *et al.* 2017)。

4 ホライズンを念頭に置く、あくまでもチャビン・デ・ワンタルを中心とした社会変化の議論を脱し、対等に共存するセンターとしてクントゥル・ワシを位置づけた点は、地域での経験論的な実証データの厚みに重きを置くその方法論的独自性とも深く結びついていると考えられる(Onuki 2002)。

2015; Kembel & Rick 2004; Rick 2005, 2008; Rick *et al.* 2010)。彼らのデータは、チャビン・デ・ワンタルの建築プロセスが従来考えられてきたよりもはるかに複雑であったことを明らかにし、その編年上の位置づけに関して新たな議論を提示している。しかし、スタンフォード大学調査団の研究に関して包括的な出版はなされておらず、その議論も大きく変わり続けているため、学史上に位置づけることが難しい。またその出版物はチャビン・デ・ワンタルの建築に焦点を当てたものが多く、特に近年はチャビン問題、あるいはチャビン現象を扱ったものは少ない。このような点を踏まえたうえで本論では、バーガーのチャビン論とスタンフォード大学チームの議論を本論に必要な範囲で比較しておくにとどめたい。

リックとシルビア・ケンベルは、チャビン・デ・ワンタルの編年上の位置づけと他センターとの関係に関してバーガーの論と大きく異なる新たな解釈を提示している。彼らによれば、チャビン・デ・ワンタルの歴史は、ウラバリウ相の開始時期である 1000 – 900 cal. B.C. ではなく、1500 – 1200 cal. B.C. (Rick 2005: 75) のセパレート・マウンド・ステージ (Separate Mound Stage) にさかのぼり (Kembel 2001, 2008)、その建築が最後に更新されたのはハナバリウ相に対応する 500 – 400 cal. B.C. ではなく 900 – 780 cal. B.C. であるという。さらに、彼らはチャビン・デ・ワンタルが形成期前期の後半に、クピスニケ文化やマンチャイ文化の祭祀センターとはほぼ同時期に出現し、形成期中期を通じて並行して発展したと考えている (Kembel & Rick 2004; Rick 2005)。彼らの論においては、チャビン・デ・ワンタルと他地域の祭祀センターで共有される様々な要素は、先行文化の統合ではなく、両者が長い期間を通じて相互に交流し続けたことの結果として現れたものということになる。このため、多様な地域文化の「後の統合者 (late synthesizer)」として、ハナバリウ相におけるチャビン・デ・ワンタルを位置づけるバーガーとは明確に対立する。また彼らは、バーガーの論のもう 1 つの重要な点、すなわち形成期後期後半における汎地域的な宗教イデオロギー (チャビン・カルト) の拡散を否定している。

その初期の議論において彼らは、チャビン・デ・ワンタルは 500 cal. B.C. 頃に、祭祀センターとしての機能を失ったと論じた。つまり、バーガーが論じたような宗教ネットワークの形成、技術革新、社会変化などはこの時期に起こらず、ハナバリウ的土器の出現は、チャビン・デ・ワンタルが祭祀センターとして機能しなくなってからの現象であるという解釈であった (Kembel 2001; Kembel & Rick 2004; Rick 2005)。数年後の最新の出版物において彼らはその立場を大きく変化させ、ハナバリウ的土器に対応する年代を 800 cal. B.C. に

変更し、彼らの建築上の編年におけるブラック・アンド・ホワイト・ポータル・ステージ (Black and White Portal Stage) に対応させている (Kembel 2008; Mesia 2007)。そしてさらに近年の出版物では、ハナバリウイデ (ハナバリウ相的) という用語を用い、チャビン・デ・ワンタルにおける明確な土器の変化を否定するに至っている (e.g. Rick *et al.* 2010; Kembel & Haas 2015)。ただし、この変更がここまで論じてきたチャビン問題／現象とどのように関わるのかは、いまだ示されていない。

変化し続けるリックとケンベルの論を明確に位置づけることは困難であるが、明確なバーガーに対する批判として以下の 2 点が挙げられるだろう。

- ①チャビン・デ・ワンタルの最盛期は紀元前 900-780 年であり、バーガーのハナバリウ相の年代と大幅にずれる (e.g. Kembel 2008; Rick *et al.* 2010)。
- ②チャビン・デ・ワンタルは唯一の中心ではなく、複数の対等なセンターの中の 1 つであるにすぎない (e.g. Kembel & Rick 2004)。

これらのリックとケンベルの主張は、紀元前 400-200 年というバーガーが設定したハナバリウ相に対応する時期 (e.g. Burger 1981, 1984) が山地における形成期神殿の最盛期ではない点を指摘し、チャビン・デ・ワンタルを中心とした宗教の拡散を否定するなど、クントウル・ワシの成果によって 90 年代に指摘された点と大きく重なっている。紙幅の都合から彼らの根拠を詳細に吟味することは割愛するが、チャビン・デ・ワンタルの最盛期はバーガーが想定した時期より早いという点は、現在では彼を含む多くの研究者に受け入れられている成果であるといえるだろう。

現時点で指摘しておくべき点は、リックのアプローチに根強いプロセス考古学的な数量化と科学主義的傾向、そして地域を閉じたものとして扱う視点が指向性として見受けられることである (e.g. Rick 2005, 2008, 2014)。この点は上記②の彼の解釈の傾向にも表れており、チャビン・デ・ワンタルの地域を超えた重要性和地域間交流の展開というよりは、チャビン・デ・ワンタル自体の発展プロセスに記述の詳細が置かれる傾向にあり、バーガーとの対立も実際のところは年代それぞれをめぐり議論にとどまっていることが多い。この点は、彼のこれまでの研究が、強いプロセス考古学の影響下で行われてきたこと (e.g. Rick 1980) を考えれば理解できる点であり、バーガーとリックの対立はアメリカ考古学における異なる理論的潮流の対立でもあると整理できよう。文化史学

派の巨人であるジョン・ロウに深く学び、プロセス考古学の隆盛に対峙しながらポストプロセス考古学の影響を取り込んだバーガー (e.g. Burger 1983, 1988)と、プロセス考古学の中心地であるミシガン大学でケント・フラナリーに学んだジョン・リックの対立は、マクロなパターン認識が在地における適応プロセスかという、基本的な理論的立場の違いを前提として生じたものともいえる。

VIII 汎地域的視点と 在地性

2000年代に入ると、さらに形成期中期・後期の遺跡の調査が進展し、チャビン問題は新たな局面を迎えていると言えてよい。山地と海岸で数多くの新たな調査が行われたことと、補正年代の普及と相まって絶対年代資料が充実し、編年を地域間レベルで構築することが可能となったことが特に重要な点であろう(e.g. Burger *et al.* [eds.] 2019)。分析手法や理論の面でも様々な新たなアプローチが生まれているが、本論では学史上の在地性をめぐる議論に焦点を当てて研究の現状を整理してみたい。

とりわけ重要なのは、バーガーが定義した「ハナバリウ相土器に対応する土器」が各地で出現する年代に、ある程度の同時代性が見られることが明らかになったことである。ただしそれは、バーガーが最初に提示した紀元前400年ではなく、クントゥル・ワシのクントゥル・ワシ期の開始に近い紀元前850-700年であった(e.g. Matsumoto 2019)。また、この時期に中央アンデスの様々な地域で、豊かな副葬品を有する埋葬や、貴金属製品などの装身具が発見されるなど、社会経済組織の変化が生じたことが明らかとなりつつある(e.g. Burger *et al.* [eds.] 2019)。このような状況において、バーガーは新たなデータを得たうえでチャビン・デ・ワンタル遺跡に関する自身の編年案を以下のように更新している(Burger 2019: Table 2)。

ウラバリウ相	紀元前 950-800 年
チャキナニ相	紀元前 800-700 年
ハナバリウ相	紀元前 700-400 年

さらに、このチャビン・デ・ワンタル遺跡の編年案を基に、

バーガーは改めて自身のチャビン論に関して、変更を加える必要を認めつつも現在でも有効であると論じている(Burger 2019)。これまでのバーガーの論への批判で、最も説得力に富んでいた部分の1つは、彼の「紀元前400年に類似した物質文化の様式が広い地理的に広がる」という点(e.g. Burger 1988)に関する、具体的な絶対年代データからの批判であった(e.g. Mesia 2007; Rick *et al.* 2010)。そのため、この点に変更を加えた新たな編年案に基づいてこれまでの議論を再検討しておくことは極めて重要であろう。

おそらく最も重要なのは、クントゥル・ワシとクピスニケをめぐる議論であろう。バーガーがハナバリウ相と同時期であると考え、年代データからそのずれが指摘されてきたクントゥル・ワシ期の年代は(e.g. 井口 1996: 19; Onuki [ed.] 1995: 210)、この修正案においてハナバリウ相の年代にかなり近づいたといえる。このように考えた時に、クントゥル・ワシ期とハナバリウ相をめぐる解釈の違いは(e.g. Burger 1988; Inokuchi 1999)、物質文化の様式をめぐる解釈の違いという点が前面に出ることとなる。つまり、様式上の類似性を北海岸とクントゥル・ワシの関係という在地的な現象として解釈するか、汎地域的なホライズン現象として解釈するかは、絶対年代によってその是非を問うことができるものではなくまってしまっている。クピスニケ文化とクントゥル・ワシ期の類似性は、バーガーの論においては「チャビン・カルトがクピスニケの要素を取り込んで再構成し、それがクントゥル・ワシに伝播した結果」となるだろうし、クントゥル・ワシの在地的な展開から見た時には、クピスニケ文化との直接的なつながりを想定することになる。実際のところ、ハナバリウ相のチャビン・デ・ワンタル、クントゥル・ワシ、クピスニケ文化の諸遺跡の間には、図像表現や遺物様式の点で非常に多くの一般的な類似が見取れるうえに、それぞれをチャビンと呼ぶかクピスニケと呼ぶかという議論は現代に至るまで連綿と受け継がれているのである(e.g. Burger 2012; Kaulicke 2016)。

現状では、遺物様式にとどまらない包括的な分析に基づく日本調査団のクントゥル・ワシをめぐる議論(井口 1996; 加藤・井口 1998)がより説得力を持つと筆者は考えているが、ここでいくつかの疑問が浮かぶ。このようなクピスニケをめぐる議論は、大きな社会的経済的変化が北海岸と北高地にとどまらない、中央アンデス全域に紀元前800年前後に起こったというデータとどのように関わってくるのか? クントゥル・ワシとクピスニケ文化をめぐる動きは、チャビン・デ・ワンタルと完全に切り離すことが可能なのだろうか? それまでクピスニケ文化やチャビン・デ・ワンタルとの緊密な交流がなかった多くの地域で、紀元前800年頃突如として在地伝統の断絶と物質文

化の様式的類似が確認されるようになるのはなぜなのか⁵? 同時期の中央海岸のネペーニヤ谷下流域において、チャビン／クピスニケ的な宗教伝統が維持されつつもその直接的な図像表現などへの影響が減少し、在地的な要素を有する祭祀建築が興隆し始めるという逆のパターンが見られるのはなぜなのか(e.g. Shibata 2014; Chicoine *et al.* 2017)? こうしてみると、在地性という点で説得力を有する解釈が必ずしもマクロなパターンの中に位置づけられていないという現状が浮かびあがってくる。改めて汎地域的なパターンと在地性をめぐる解釈を両立させるような枠組みが求められているのではないだろうか。

IX おわりに

チャビン問題をめぐる学史の流れは、チャビンと名づけられた広域にみられる物質文化のパターンを汎地域的な現象(チャビン現象)としてとらえようとするマクロな視点と、在地性、すなわち地域的な多様性の発展に焦点を当てたミクロな視点が、その時に使用可能なデータと調査者の理論的背景との関わりの中で揺れ動き、絡み合いながら研究が進んできたことを示唆している。そして現状は、豊かな在地性をめぐるデータを汎地域的な枠組みの中に位置づける必要性が浮かびあがってきた状態にあると考えられる。ここでは簡略にこの点に関する筆者のアイデアを模式的に提示して結論に代えたい。

チャビン問題を考える際に根強く残ってきたホライズン概念はここにきてその限界を露呈したと考えざるを得ない。特にクントゥル・ワシとパコパンパという北高地の大神殿における調査の進展は、チャビン・デ・ワンタルと同時期に異なる地域で独自の歴史背景を有した大神殿が存在したことを実証的に明らかにした。そしてこれらの神殿を中心とした社会で紀元前 800 年頃、同時といっても良い時期に大きな社会変化が生じたことを、チャビン・デ・ワンタルの中心性を暗黙の裡に担保するホライズン概念に基づく伝播論によって説明することは適切ではない(e.g. 関編 2017)。特にパコパンパ遺跡における変化のプロセスが、北海岸との関わりというよりは、北高地の在地的な発展と密接に結びついていることを示すデータは、チャビン・ホライズンのみならず、チャビンとクピスニケという長年にわたる二項対立の図式を乗り越える成果であ

ると位置づけられるであろう。

しかし一方で、筆者が調査を行ってきたペルー南高地、アヤクチョ地方は、バーガーがそれまで唱えていたチャビン論の枠組みで明確に解釈し得る。紀元前 700 年頃にいわゆるハナバリウ的な土器が出現すると共に神殿の発生と大規模化、社会階層化の萌芽が見られる。同時に黒曜石など、チャビン・デ・ワンタルとの交流が活発化したことが示されるのである(松本 2017; Matsumoto 2010, 2019)。このような変化はチャビン・デ・ワンタルとアヤクチョ地方の神殿群の関係を、黒曜石を経済的要因として介在させた「中央と周縁」、あるいは「世界システム論」などの視点から解釈する必要性を浮かびあがらせている(Matsumoto *et al.* 2018)。

このような状況を総体として考察するための枠組みとしてどのようなものが適切なのであろうか。当面は、古典的な概念である相互作用圏(Interaction Sphere)(Caldwell 1964)の用語を用いることが有効であろう。相互作用圏はアメリカ中南東部のホープウェル文化の研究から生まれた概念で、ある種の伝統や地理的範囲を超えた広がりの中での物質文化の共通性を、威信財経済や宗教的信仰の共有のネットワークという視点から分析するために使われたものであるが、現在ではより広い意味で、1つの「文化」、あるいは「伝統」を超えた地理的範囲に見られる物質文化のパターンを描写するために用いられることが多い(e.g. Church 1996)。筆者の考えは、異なる性質の相互作用圏が中央アンデスにおいて共存し重なり合う、その総体としてチャビン現象をとらえるべきであるという点にある。上述の2つの異なる事例、北高地の大センターであるパコパンパ、クントゥル・ワシとチャビン・デ・ワンタルの関係と、チャビン・デ・ワンタルと南高地のセンター群の関係はこの点を示す好例である。前者の関係は対等な政体としてのセンターが交流し、結果として社会組織や宗教的信仰に連動した変化が起こるという、レンフリューとチェリーによる同等政体間の相互作用(Peer-Polity Interaction)として理解することが可能である(Renfrew & Cherry [eds.] 1986)。つまり、パコパンパ、クントゥル・ワシとチャビン・デ・ワンタルは同等政体間の相互作用を特徴とする相互作用圏を構成し、そしてそれぞれのセンターが、自身の在地的な、いわば下位の相互作用圏を有していることになる。この場合、先述のチャビン・デ・ワンタルと南高地の「中央と周縁」の関係によって描写される相互作用圏は、チャビン・デ・ワンタルを中心とした地域的／在地的な

5 例として、中央高地ワスコ盆地に位置するコシュ遺跡(e.g. Izumi & Terada [eds.] 1972)、南高地に位置するアターリヤ遺跡(Young 2017)と後述するカンパナユック・ルミ遺跡(e.g. Matsumoto 2010)などが挙げられる(図 1)。

相互作用圏と定義し得る。同様に、クントゥル・ワシは、同様の在地的な相互作用圏を北海岸との間に構成し、パコパンパにとっては、北部高地から東斜面にかけての範囲が自身を中心とした相互作用圏を構成する。これらの地域的／在地的な相互作用圏は、パコパンパ、クントゥル・ワシ、チャビン・デ・ワントルによって構成されるより上位の相互作用圏の下に、お互いに重なり合うように存在している。ここでよりミクロな事例を提示するのであれば、南高地のカンパナユック・ルミ神殿は、「チャビンの」要素が存在しない南高地の地域との間に、黒曜石の取引を通じた独立した相互作用圏を保持していたと論じることでもできる (Matsumoto *et al.* 2018)。このようなスケールも性質も異なる相互作用圏の共存と重なり合い、そのマクロな総体がチャビン現象であるという認識に立ち、それぞれの在り方を比較検討することが今後の課題であろう。そして、チャビン現象における在地的性は、時に重なり合い、溶け合い、反発しあいながら、共存する相互作用圏のある地域における動的な絡み合いの歴史的産物として位置づけることができると筆者は考えている。

謝 辞

本稿は、2018年12月26日に南山大学人類学研究所の主催のもとに開催された公開シンポジウム「遺跡に見る在来知——モニュメント、自然環境、インターアクション」での発表とその後の議論より着想を得たものである。本稿の執筆にあたっては、渡部森哉氏、佐藤吉文氏、山本陸氏にきわめて建設的なコメントをいただいた。また、井口欣也氏、芝田幸一郎氏には重要な文献をご送付いただいた。御礼申し上げます。本稿は、新学術領域研究（研究領域提案型）出ユーラシアの統合的人類史学 - 文明創出メカニズムの解明 - A02 班：心・身体・社会をつなぐアート／技術（研究代表者：松本直子）の成果であるが、本稿で言及したカンパナユック・ルミ遺跡の調査成果は、科研費若手 B 25770282（研究代表者：松本雄一 2013-2014）、科研費若手 A 15H05383（研究代表者：松本雄一 2015-2018）に基づくものである。

参 照 文 献

(日本語文献)

井口欣也

1996 「チャビン問題再考——中央アンデス地域形成期研究の新たな展開に向けて」『リトルワールド研究報告』13: 1-35.

大貫良夫・加藤泰建・関雄二(編)

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』朝日新聞出版。

加藤泰建・井口欣也

1998 「コンドルの館」『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』加藤泰建・関雄二(編)、pp. 163-224、角川書店。

加藤泰建・関雄二(編)

1998 『文明の創造力——古代アンデスの神殿と社会』角川書店。

関雄二

2008 「アンデス文明の起源を求めて 日本アンデス考古学調査50周年記念シンポジウムより」『チャスキ』38: 7-9.

関雄二(編)

2017 『アンデス文明——神殿から読み取る権力の世界』臨川書店。

松本雄一

2009 「カンパナユック・ルミとチャビン問題——チャビン相互作用圏の周縁からの視点」『古代アメリカ』12: 65-94.

2017 「ペルー南高地の神殿と権力生成:——「周縁」から見た形成期社会」『アンデス文明 神殿から読み取る権力の世界』関雄二(編)、pp. 403-432、臨川書店。

(欧文文献)

Bennett, Wendell C.

1944 The North Highlands of Peru: Excavations in the Callejon de Huaylas and at Chavin de Huantar, *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 39(1): 1-114.

Blanton, Richard E. & Gary M. Feinman

1984 The Mesoamerican World-System, *American Anthropologist* 86: 673-682.

Burger, Richard L.

- 1978 *The Prehistoric Occupation of Chavin, Ancash, in the Initial Period and Early Horizon*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of California at Berkeley.
- 1981 The Radiocarbon Evidence for the Temporal Priority of Chavín de Huántar, *American Antiquity* 46(3): 592-602.
- 1983 Review of Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture, by Ian Hodder, *American Scientist* 71(3): 322.
- 1984 *The Prehistoric Occupation of Chavín de Huántar, Peru*. University of California Press.
- 1988 Unity and Heterogeneity within the Chavín Horizon. In R. W. Keatinge (ed.), *Peruvian Prehistory*, pp. 99-144. Cambridge University Press.
- 1989 El Horizonte Chavín: ¿Quimera estilística o metamorfosis socioeconómica?, *Revista Andina* 2: 543-573.
- 1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. Thames & Hudson.
- 1993 The Chavin Horizon: Stylistic Chimera or Socioeconomic Metamorphosis? In D. S. Rice (ed.), *Latin American Horizons*, pp. 41-82. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*.
- 1998 *Excavaciones en Chavín de Huántar*. Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- 2008 Chavín de Huántar and Its Sphere of Influence. In H. Silverman & W. H. Isbell (eds.), *Handbook of South American Archaeology*, pp. 681-703. Springer.
- 2012 Central Andean Language Expansion and the Chavín Sphere of Interaction. In P. Heggarty & D. Beresford-Jones (eds.), *Archaeology and Language in the Andes: A Cross-Disciplinary Exploration of Prehistory*, pp. 135-161. The British Academy & Oxford University Press.
- 2019 Understanding the Socioeconomic Trajectory of Chavín de Huántar: A New Radiocarbon Sequence and Its Wider Implications, *Latin American Antiquity* 30(2): 373-392.
- Burger, Richard L. & Ramiro Matos Mendieta
2002 Atalla: A Center on the Periphery of the Chavín Horizon, *Latin American Antiquity* 13(2): 153-177.
- Burger, Richard L. & Lucy C. Salazar
2008 The Manchay Culture and the Coastal Inspiration for Highland Chavín Civilization. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. 85-105. *Cotsen Institute of Archaeology, University of California*.
- Burger, Richard L., Lucy C. Salazar & Yuji Seki (eds.)
2019 *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC*. Yale University Publications in Anthropology 94. Peabody Museum of Natural History, and the Department of Anthropology, Yale University.
- Caldwell, Joseph R.
1964 Interaction Spheres in Prehistory. In J. R. Caldwell & R. L. Hall (eds.), *Hopewellian Studies*, pp. 133-143. *Illinois State Museum*.
- Carrión Cachot, Rebeca
1948 La Cultura Chavín. Dos nuevas colonias: Kuntur Wasi y Ancón, *Revista del Museo Nacional de Antropología y Arqueología* 2(1): 99-172.
- Chase-Dunn, Christopher & Thomas D. Hall
1997 *Rise and Demise: Comparing World-Systems*. Westview Press.
- Chicoine, David, Hugo Ikehara, Koichiro Shibata & Matthew Helmer
2017 Territoriality, Monumentality, and Religion in Formative Period Nepeña, Coastal Ancash. In S. A. Rosenfield & S. L. Bautista (eds.), *Rituals of the Past: Prehispanic and Colonial Case Studies in Andean Archaeology*, pp. 123-149. *University Press of Colorado*.
- Church, Warren B.
1996 *Prehistoric Cultural Development and Interregional Interaction in the Tropical Montane Forests of Peru*. Ph.D. Dissertation, Yale University, New Haven.

- Conkey, Margaret W.
1990 Experimenting with Style in Archaeology: Some Historical and Theoretical Issues. In M. W. Conkey & C. A. Hastorf (eds.), *The Uses of Style in Archaeology*, pp. 5-17. Cambridge University Press.
- Cusick, James G. (ed.)
1998 *Studies in Culture Contact: Interaction, Culture Change, and Archaeology* (Occasional Paper No. 25). Center for Archaeological Investigations, Southern Illinois University at Carbondale.
- Elera, Carlos G.
1993 El complejo cultural Cupisnique: antecedentes y desarrollo de su ideología religiosa. In L. Millones & Y. Onuki (eds.), *El Mundo Ceremonial Andino* (Senri Ethnological Studies No. 37), pp. 229-257. National Museum of Ethnology.
1997 Cupisnique y Salinar: algunas reflexiones preliminares. In E. Bonnier & H. Bischof (eds.), *Arqueologica Peruana 2: Arquitectura y Civilización en los Andes Prehispánicos*, pp. 176-201. Reiss-Museum.
1998 *The Puemape Site and the Cupisnique Culture: A Case Study on the Origin and Development of Complex Society in the Central Andes, Peru*. Ph.D. Dissertation, University of Calgary, Calgary.
- Feinman, Gary M. & Joyce Marcus (eds.)
1998 *Archaic States*. School for Advanced Research Press / University of New Mexico Press.
- Hall, Thomas. D., Nick P. Kardulias & Christopher Chase-Dunn
2011 World-Systems Analysis and Archaeology: Continuing the Dialogue. *Journal of Archaeological Research* 3: 233-279.
- Hegmon, Michelle
1992 Archaeological Research on Style. *Annual Review of Anthropology* 21: 517-536.
1998 Technology, Style, and Social Practices: Archaeological Approaches. In M. T. Stark (ed.), *The Archaeology of Social Boundaries*, pp. 264-279. Smithsonian Institution Press.
- Inokuchi, Kinya
1999 La cerámica de Kuntur Wasi y el problema Chavín. *Boletín de Arqueología PUCP* 2[1998]: 161-180.
- Izumi, Seiichi & Kazuo Terada (eds.)
1972 *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. University of Tokyo Press.
- Jennings, Justin
2011 *Globalizations and the Ancient World*. Cambridge University Press.
- Kaulicke, Peter
1994 *Los Orígenes de la Civilización Andina. Arqueología del Perú*. Historia General del Perú, tomo 1. Editorial Brasa.
2015 Paracas y Chavín: variaciones sobre un tema longevo. *Boletín de Arqueología PUCP* 17[2013]: 263-289.
2016 Las funciones de Chavín de Huántar, su impacto suprarregional y el problema lingüístico en los Andes centrales. *Revista Andina* 54: 153-168.
- Kembel, Silvia Rodríguez
2001 *Architectural Sequence and Chronology at Chavín de Huántar, Peru*. Ph.D. dissertation, Department of Anthropological Sciences, Stanford University.
2008 The Architecture at the Monumental Center of Chavín de Huántar: Sequence, Transformations, and Chronology. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. 35-81. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Kembel, Silvia Rodríguez & Herbert Haas
2015 Radiocarbon Dates from the Monumental Architecture at Chavín de Huántar, Perú. *Journal of Archaeological Method and Theory* 22: 345-427.
- Kembel, Silvia Rodríguez & John W. Rick
2004 Building Authority at Chavín de Huántar: Models of Social Organization and Development in the Initial Period and Early Horizon. In H. Silverman (ed.), *Andean Archaeology* (Blackwell Studies in Global Archaeology), pp. 51-76. Blackwell

- Publishing.
- Kohl, Philip L.
 1987 The Use and Abuse of World Systems Theory: The Case of the Pristine West *Asian State, Advances in Archeological Method and Theory* 11: 1-35.
 2008 Shared Social Fields: Evolutionary Convergence in Prehistory and Contemporary Practice, *American Anthropologist* 110(4): 495-506.
- Kroeber, Alfred L.
 1944 *Peruvian Archaeology in 1942*. Viking Fund Publications in Anthropology 4. Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research.
- Larco Hoyle, Rafael
 1941 *Los Cupisniques*. Casa Editora La Crónica y Variedades.
 1948 *Cronología Arqueológica del Norte del Perú*. Sociedad Geográfica Americana.
- Lumbreras, Luis G.
 1971 Toward a re-evaluation of Chavín. In E. P. Benson (ed.), *Dumbarton Oaks Conference on Chavín*, pp. 1-28. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
 1989 *Chavín de Huántar en el Nacimiento de la Civilización Andina*. Instituto Andino de Estudios Arqueológicos.
 1993 *Chavín de Huántar: Excavaciones en la Galería de las Ofrendas*. Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie, Band 51. Verlag Philipp von Zabern.
- Lumbreras, Luis G. & Hernan Amat Olazabal
 1969[1965-66] Informe preliminar sobre las galerías interiores de Chavín (primera temporada de trabajo), *Revista del Museo Nacional* 34: 143-197.
- MacNeish, Richard S., Thomas C. Patterson & David L. Browman
 1975 *The Central Peruvian Prehistoric Interaction Sphere*. Papers of the Robert S. Peabody Foundation for Archaeology, vol. 7. Robert S. Peabody Foundation for Archaeology, Phillips Academy.
- Matsumoto, Yuichi
 2010 *The Prehistoric Ceremonial Center of Campanayuc Rumi: Interregional Interactions in the South-central Highlands of Peru*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, Yale University.
 2019 South of Chavín: Initial Period and Early Horizon Interregional Interactions between the Central Highlands and South Coast. In R. L. Burger, L. C. Salazar & Y. Seki (eds.), *Perspectives on Early Andean Civilization in Peru: Interaction, Authority, and Socioeconomic Organization during the First and Second Millennia BC* (Yale University Publications in Anthropology 94), pp. 173-188. Peabody Museum of Natural History, and the Department of Anthropology, Yale University.
- Matsumoto, Yuichi, Jason Nesbitt, Michael D. Glascock, Yuri Cavero Palomino & Richard L. Burger
 2018 Interregional Obsidian Exchange during the late Initial Period and Early Horizon: New Perspectives from Campanayuc Rumi, *Latin American Antiquity* 29(1): 44-63.
- McIntosh, Roderick J.
 2005 *Ancient Middle Niger: Urbanism and the Self-organizing Landscape*. Cambridge University Press.
- Menzel, Dorothy
 1964 Style and Time in the Middle Horizon, *Ñawpa Pacha* 2: 1-105.
 1976 *Pottery Style and Society in Ancient Peru: Art as a Mirror of History in the Ica Valley, 1350-1570*. University of California Press.
- Menzel, Dorothy, John H. Rowe & Lawrence E. Dawson
 1964 *The Paracas Pottery of Ica: A Study in Style and Time* (University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 50). University of California Press.
- Mesía M., Christian J.
 2006 Julio C. Tello: Teoría y Practica en la Arqueología Andina, *Arqueología y*

- Sociedad* 17: 141-158.
- 2007 *Intrasite Spatial Organization at Chavín de Huántar during the Andean Formative: Three Dimensional Modeling, Stratigraphy and Ceramics*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropological Sciences, Stanford University.
- Miller, George R. & Richard L. Burger
1995 Our Father the Cayman, Our Dinner the Llama: Animal Utilization at Chavín de Huántar, Peru, *American Antiquity* 60(3): 421-458.
- Ochatoma Paravecino, José
1985 *Jargam Pata de Huamanga: Investigaciones arqueológicas en un yacimiento Correspondiente al Horizonte Temprano*. Tesis de Bachiller, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga, Ayacucho.
1998 El período formativo en Ayacucho: balances y perspectivas, *Boletín de Arqueología PUCP* 1[1997]: 79-114.
- Onuki, Yoshio
2002 Japanese Research on Andean Prehistory, *Japanese Review of Cultural Anthropology* 3: 57-78.
- Onuki, Yoshio (ed.)
1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Hokusen-Sha.
- Phillips, Philip & Gordon R Willey
1953 Method and Theory in American Archaeology: An Operational Basis for Culture-Historical Integration, *American Anthropologist* 55(5-1): 615-631.
- Pitts, Martin
2008 Globalizing the Local in Roman Britain: An Anthropological Approach to Social Change, *Journal of Anthropological Archaeology* 27(4): 493-506.
- Pozorski, Thomas & Shelia Pozorski
1993 Review: Chavín and the Origins of Andean Civilization, by Richard L. Burger, *Latin American Antiquity* 4(4): 389-390.
- Quilter, Jeffrey
2008 Preface. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. xxiii-xxvi. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Ramón Joffré, Gabriel
2005 Periodificación en Arqueología peruana: geología y aporía, *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 34(1): 5-33.
- Renfrew, Colin
1986 Introduction: Peer Polity Interaction and Socio-political Change. In C. Renfrew & J. F. Cherry (eds.), *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*, pp. 1-18. Cambridge University Press.
- Renfrew, Colin & John F. Cherry (eds.)
1986 *Peer Polity Interaction and Socio-political Change*. Cambridge University Press.
- Rice, Don Stephen
1993 The Making of Latin American Horizons: An Introduction to the Volume. In D. S. Rice (ed.), *Latin American Horizons*, pp. 1-13. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Rick, John W.
1980 *Prehistoric Hunters of the High Andes*. Academic Press.
2005 The Evolution of Authority and Power at Chavín de Huántar, Peru. In K. J. Vaughn, D. Ogburn & C. A. Conlee (eds.), *Foundations of Power in the Prehispanic Andes* (Archaeological Papers of the American Anthropological Association, Number 14), pp. 71-89. University of California Press.
2008 Context, Construction, and Ritual in the Development of Authority at Chavín de Huántar. In W. Conklin & J. Quilter (eds.), *Chavín: Art, Architecture and Culture* (Monograph 61), pp. 3-34. Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
2014 Cambio y continuidad, diversidad y coherencia: Perspectivas sobre variabilidad en Chavín de Huántar y el Período Formativo. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas*

- Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp. 261-290. Museo Nacional de Etnología.
- Rick, John W., Christian Mesia, Daniel Contreras, Silvia R. Kembel, Rosa M. Rick, Matthew Sayre & John Wolf
 2010 La cronología de Chavín de Huántar y sus implicancias para el Periodo Formativo, *Boletín de Arqueología PUCP* 13[2009]: 87-132.
- Rowe, John Howland
 1956 Archaeological Explorations in Southern Peru, 1954-1955, *American Antiquity* 22(2): 135-151.
 1962 Stages and Periods in Archaeological Interpretation, *Southwestern Journal of Anthropology* 18(1): 40-54.
 1967a[1966] An Interpretation of Radiocarbon Measurements on Archaeological Samples from Peru. In J. H. Rowe & D. Menzel (eds.), *Peruvian Archaeology: Selected Readings*, pp. 16-30. Peek Publications.
 1967b[1962] Form and Meaning in Chavin Art. In J. H. Rowe & D. Menzel (eds.), *Peruvian Archaeology: Selected Readings*, pp. 72-103. Peek Publications.
- Schneider, Jane
 1977 Was There a Pre-capitalist World-system?, *Peasant Studies* 6: 20-29.
- Schortman, Edward M. & Patricia A. Urban (eds.)
 1992 *Resources, Power, and Interregional Interaction*. Plenum Press.
- Shady Solís, Ruth
 2014 La civilización Caral: Paisaje cultural y sistema social. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp. 51-103. Museo Nacional de Etnología.
- Shibata, Koichiro
 2010 El sitio de Cerro Blanco de Nepeña dentro de la dinámica interactiva del Periodo Formativo, *Boletín de Arqueología PUCP* 12[2008]: 287-315.
 2014 Centro de "Reorganización costeña" durante el Período Formativo Tardío: Un ensayo sobre la competencia faccional en el valle bajo de Nepeña, costa nor-central peruana. In Y. Seki (ed.), *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (Senri Ethnological Studies 89), pp. 245-260. Museo Nacional de Etnología.
- Silva, Jorge Elias
 1978 *Chavín de Huántar: un complejo multifuncional* (Series Investigaciones, No. 1). Gabinete de Arqueología, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Silverman, Helaine
 1996 The Formative Period on the South Coast of Peru: A Critical Review, *Journal of World Prehistory* 10(2): 95-146.
- Spicer, Edward H.
 1961 Types of Contact and Processes of Change. In E. H. Spicer (ed.), *Perspectives in American Indian Culture Change*, pp. 517-544. University of Chicago Press.
- Tello, Julio C.
 1943 Discovery of the Chavín culture in Peru, *American Antiquity* 9(1): 135-160.
 1960 *Chavín: Cultura Matriz de la Civilización Andina*. Publicación Antropológica del Archivo "Julio C. Tello" de la Universidad Nacional Mayor de San Marcos, volumen II. Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- Trigger, Bruce G.
 2004 *Understanding Early Civilizations*. Cambridge University Press.
- Wallerstein, Immanuel
 1974 *The Modern World System I. Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*. Academic Press.
 1993 World Systems versus World System: A Critique. In A. G. Frank & B. K. Gills (eds.), *The World System: Five Hundred Years or Five Thousand?*, pp. 292-296. Routledge.
- Uhle, Max
 1902 Types of Culture in Peru, *American Anthropologist* 4(4): 753-759.

- Willey, Gordon R.
- 1945 Horizon Styles and Pottery Traditions in Peruvian Archaeology, *American Antiquity* 11(1): 49-56.
- 1948 A Functional Analysis of "Horizon Styles" in Peruvian Archaeology. In W. C. Bennett (ed.), *A Reappraisal of Peruvian Archaeology* (Memoirs of the Society for American Archaeology 4), pp. 8-15. Society for American Archaeology and the Institute of Andean Research.
- 1951 The Chavín Problem: A Review and Critique, *Southwestern Journal of Anthropology* 7(2): 103-144.
- 1962 The Early Great Styles and the Rise of the Pre-Columbian Civilizations, *American Anthropologist* 64(1): 1-14.
- Willey, Gordon R. & Philip Phillips
- 1958 *Method and Theory in American Archaeology*. University of Chicago Press.
- Wolf, Eric R.
- 1984 Culture: Panacea or Problem?, *American Antiquity* 49(2): 393-400.
- Young, Michelle E.
- 2017 De la Montaña al Mar: Intercambio entre la sierra centro-sur y la costa sur en el periodo Horizonte Temprano, *Boletín de Arqueología PUCP* 22: 9-34.

Issues of Locality in the Study of the Andean Civilization:

Perspectives from a Study History of the Chavín Problem

Yuichi MATSUMOTO*

For the purpose of understanding the issues of locality in Andean archaeology, this article focuses on the study history of the Chavín problem, which continues to be one of the most important themes for more than half a century. From the time of Julio C. Tello and Rafael Larco Hoyle, the focus of the Chavín Problem has swung between the two poles of pan-regional uniformity and regional variability. These perspectives repeatedly emerged in intertwined ways in relation to the advance of archaeological researches and theoretical trends of the time. This article reviews the study history through a historiographic approach and intends to contextualize recent studies in a broader academic context. Through the synthesis of the multiple ideas that emerged in the study history, possible productive directions for future research are explored.

Keywords:

Andean civilization, Formative period, Chavín problem, study history, locality